

## レヴィナスのユダヤ的学知「無限の観念」の考察

矢野 泉

### A Consideration on Levinas Jewish Learnings ‘Notion of Infinity’

YANO Izumi

#### 1.はじめに

本稿では「神を捨象」しないレヴィナスに注目したい。「神を捨象」しない論考は少数であるかもしれない。しかし、少数への注目は、既知の世界の穏やかな湖面に小石を投げ入れるくらいの揺さぶりをかけるだろう。

管見の限り、レヴィナスは神の観念を手がかりに教えを構成しているのにもかかわらず、レヴィナスの哲学は「神を持ちださなくてもそれ自身で完結できる学問領域」(佐藤義之,2020:211)であると見做される。レヴィナスの学知について、『神』ということばを挙げることのないまま論議を進めることができたのである(同前)と語られ、「神の観念」を使わないで「倫理学の論議としてレヴィナスを扱うことは見当外れでも不当でもない」(同前)といわれる。こうした論者に共通するのは「神をもたないわれわれ」(同前)という前提である。「神をもたない」というのは、学問に「神」の観念を用いないありようを指す。しかし、レヴィナスはこういう。(レヴィナス,2010:19)「哲学が本質的に無神論的であるという印象はなく、聖句が示す神は、神のあらゆる擬人的な比喻にもかかわらず、哲学者にとって精神の尺度でありつづける。」この哲学者はレヴィナス自身を指しているのだろう。レヴィナスの学知を理解するために、レヴィナスのように、「神の観念」を使えばよいのではないのか。

主観的に絶対的な確信を抜きにして、はっきりと誰の目にも見える形で分かるように存在しているわけではない神を、レヴィナスにならって持ち出すことには、学問的なためらいはある。しかし、レヴィナスに敬意を持ち彼の文脈に共感するという立場をとって、本稿ではあえて「神を捨象」しない。レヴィナス哲学を研究する先達のなかには、ユダヤ教典の「創世記」や「雅歌」を題材に、レヴィナスの現象学を論じる永井晋もいる(『現代思想 レヴィナス』:300-313)。レヴィナス哲学研究の第一人者の合田正人と村上靖彦の対談『現代思想』(2012:35-59)でも、「ユダヤ学」という issue が立てられているので、「神を捨象」せずにレヴィナスに共感する角度は的外れではないといえよう。

本稿の目的は、目に見える形で分かる現象を「存在」と呼び、存在を超越して感じられる次元を聴く、ユダヤ的学知「無限の観念」の考察である。レヴィナスにおける「無限の観念」はデカルトから継承した「無限の観念」を「人間の傷み=顔」を契機に改定した鍵概念だと思量される。

## 2. レヴィナスと「無限の観念」

レヴィナスを師と仰ぐという「レヴィナスの愛弟子」内田樹は、レヴィナスの思想の特徴を、中立的に理解することは許されないものと評した。(内田樹,2001)確かに、「神を語らない」レヴィナスを読みこむことは難解であることこのうえない。レヴィナスの哲学書より、レヴィナス哲学の研究書の方がなぜレヴィナスの主張がわかりにくいのだろうか。内田はいう。(内田,2011:63)「レヴィナスがそのテキスト実践を通じてわたしたちに繰り返し告げているのは、要するに、『わたしのいつていることを分かった気になってはいけない』ということである。それは、レヴィナスの概念については、わたしたちが『分からない』せいで誤読する可能性よりも、『分かった気になった』せいで誤読する可能性が高い。『イリヤ』や『顔』というような概念(さらには『他者』『外部』『超越』などもそうだけれど)の『効果』は、それが『一義的な定義を拒否する』という点」にある。

「神ということば」についても、佐藤が指摘したように、レヴィナスが「神を所有している」わけではない。レヴィナスの思想を素直に辿るならば、レヴィナスは「神に所有されている」のである。したがって、レヴィナスの学知は、「神に所有されている」人間の生についての議論であり、「どう生きるべきか」という規範そのものをユダヤ教的に問題にする倫理学の位相として理解できる。人間の生を教育学の鍵概念のひとつであるといつてよいならば、「神に所有されている」レヴィナスのヘブライ的学知に由来する生のありようをうやむやにせず、レヴィナスの思想を追究する余地がある。レヴィナスの思想では、正義が裁きと併用される。この正義=裁きは、ヘブライ語に由来する英語で、*mishpat* ミシュパットといい、日本語の「裁き」というよりむしろ、神の統治を意味する。ミシュパットはレヴィナスが信頼するユダヤ教典(旧約聖書)で多用されている。後述する正義=裁きは、レヴィナスのユダヤ的学知においては、神の統治であり、論証可能性すなわち合理性を無限に超えてなお、人間の観念に到来する。本稿で考察している「無限の観念」は、レヴィナスによって黙示される神の統治に係わる観念である。

レヴィナスによれば、デカルトがかつて「私たちのなかにある無限の観念」(*idée-de-l'infini-ennous*) (レヴィナス,1997:10) と呼んだ観念(注 1)は、「思惟が包摂しうる限界を超えて、思惟の容量を超えて包摂する」(同前)ことである。これは、分かるけれども分かり切らないという意味の比喩的な言明である。レヴィナスは、『外の主体』の著作から分かるように、「無限の観念」あるいは「神の観念」は、有限である人間の生の領域の外から働きかける。レヴィナスは、「聖書と哲学」において、「ひとはどのようにものを考え始めるか」という問いを受けて、聖書が「最初に出会った偉大な書

物」であり、「人間の生が意味をもつために言い表された」ものであるという。しかも、レヴィナスによれば、聖書には言い尽くされない「神秘的な可能性」があり、生きることについての伝統的な注釈書である。(同前:18)ヨーロッパ(存在論的にはギリシャ文化に由来する)の人間であったデカルトとは対照的に、レヴィナスはヘブライ文化(むしろ非ヨーロッパに位置する)を継承するユダヤ教典(キリスト教徒ではなくてユダヤ教徒の聖書「トーラー」をはじめとする「タナハ」や注釈書「タルムード」)(注 2)に生きる人間であった。レヴィナスは、「哲学が本質的に無神論的であるという印象はもちません」(レヴィナス,2010:19)と語った。フィリップ・ネモとの対談形式で書かれた「聖書と哲学」の章末の注釈につきのようなレヴィナスの説明がある。

「スコラ哲学において、意識の認識作用とその形成物に対して『志向 (intentio)』の語が用いられ、心的現象は対象として何ものかをそれ自身のうちに含んでいるとされた。布伦ターノはこうした対象の志向的な内在という着想を記述的心理学の理論として継承し、その後、志向性概念はその弟子であるフッサールの現象学へと引き継がれた。」

スコラ哲学は、13世紀のトマス・アクィナスによって頂点を極めた中世の形而上学で、「無」から世界を創造したキリスト教人格神が全てに超越する存在であることを思弁した。これは「無」から世界は生じないと思量したギリシャの存在論とは別の仕方でも追究されたものである。(岩波キリスト教辞典「形而上学」2002:355)「布伦ターノの記述的心理学」(注 3)については注釈で語ろう。人間の生が志向性によって基礎づけられていると発見したフッサールの現象学をレヴィナスは若い時分から読みこんでいる。スコラ哲学はデカルトのいう「無限の観念」を、「神の観念」として追究していた学問である。近現代においてスコラ哲学は古い時代の遺物として葬られた感がある。合理性を超越する「神の観念」の追究は、合理性を基盤とする科学の対象ではないと考えられた。しかし、現代フランス哲学とりわけミッシェル・アンリやジャン＝リュック・マリオンのように、現象学の立場から「神の観念」を追究する道が開かれている。かかる追究では、神は学究される相対的な対象として語られる。「信仰」の対象として絶対的に超越する存在であると捉えたスコラ哲学における「神」を分析し尽くしていくことで、スコラ哲学に見られた矛盾、すなわち絶対的なものを相対的に分析し尽くすことはできないという矛盾をときほぐそうと試みられている。レヴィナスの表現を借りると(レヴィナス,2010:30)、つぎのように記述される。

「思考における覆い隠された志向を呼び戻すこと、つまり、現象学的な作業の方法論もまた、あらゆる哲学的な分析に不可欠であると思われるいくつかの考えの根源にあるものです。意識の志向性という中世的な観念に新たな活力が与られたわけです。(中略)志向性と相関性で、同様に現象学を特徴づけるもう一つの考え方に、対象に近づく意識の諸様態は対象の本質に本質的に依存している、というものがあります。」

この「思考における覆い隠された志向」は、合理性ならざる人間の本性であり、志向は、「アデュー」神のみもと(*á Dieu*)に接近する。(注 4)「神のみもとへの接近」こそ、レヴィナスが追求した人間の倫理である。これは、「無限の観念」なき合理性では説明しきれない。それは、以下の引用に見るように、合田正人が翻訳したレヴィナスの「存在の意味」におけるフッサールとレヴィナス哲学の深意であろう。(レヴィナス,1997:324,330)

レヴィナスによれば、『あらゆる合理的定立にとっての究極的な権原は、原初的に贈与者であるところの意識としての知である。』このフッサールの命題はおそらく存在を前にして席を占める学知である。「合理性が根拠づけ(*justification*)と呼ばれたりするが、つねに論証(*démonstration*)と呼ばれるわけではないこと、知解可能性が正義=裁き(*justice*)を根拠」とする。「哲学は、これらの『「理性」が認識しない条理』を単なる心の作用に帰すことなく、この語に与えるにふさわしい語義について自問」する。

「原初的に贈与者である」のは、フッサールの命題を読み込んだユダヤ教徒レヴィナスにおいては創造主たる始原つまり神である。「合理性が根拠づけ(*justification*)と呼ばれたりするが、つねに論証(*démonstration*)と呼ばれるわけではない」とは何か。人間の生の本質が説明し尽くされるわけではないこと、むしろ、本質は説明し尽くされるものではなく、聴き取られるものであるというレヴィナスの知見に気づかされる。本質が聴き取られるものであることは、『「理性」が認識しない条理』を単なる心の作用に帰すことなく、哲学として解釈する。「この語に与えるにふさわしい語義について自問」ことは、レヴィナスの、「もっとも深いところまで思量された思惟、『存在の外への』(*dés-inter-essement*)の思惟」(レヴィナス,1997:10-11)を示唆する。それは、合理的な思考の限界を超えて「無限の観念」に接近するという謂いである。「無限の観念」に接近するが、決して「無限なる」存在に先立つことなく、「無限なる」観念を素直に受け入れ歓待する。しかし、歓待は論証を超えるものであるため忍耐が伴う。レヴィナスの倫理の思想は、論証を超える始原の倫理である正義 =裁きを根拠としている。この始原の正義=裁きは、人間に内在的に備えられてはいない。正義=裁きが由来する「無限の観念」の到来に待たされる。

この待ちは、忍耐である。忍耐は待たされることにおいて育まれる(注 5)。「育む」を考量するにあたり、手がかりとなるのは、『全体性と無限』で示された知見である。「無限なものの観念がわたしのうちに置かれつづけることになるのである。無限なものの観念は、自己から引き出しうる以上のものを包含することの可能なたましいの存在を含意している。」(レヴィナス,2005:372) この「無限なものの観念」はレヴィナスのいう「論証を超える始原の正義=裁き」に重なる。

### 3. 「生き残っている」という有責性

レヴィナスの学知に基づくならば、わたしがわたしであるのは、わたしを召還しわたしの助力を求める他者からの有責性である。この有責性は、「無限の観念」から命じられる他者への隣人性であり、レヴィナスがいう「顔」(レヴィナス,1997:297)の露出である。レヴィナスは他者の「顔」について自問する。(同前:298-299) この他者の「顔」は、ユダヤ人ホロコーストで大量殺りくされた隣人たちの傷みである。フランス兵士として捕虜収容所においてホロコーストを逃れたレヴィナスに対して、彼の親戚一同はホロコーストを生き延びることはなかった。ひとり「生き残っている」という有責性をレヴィナスは抱える。

「今まさに死なんとしている事実—に即して、顔がこのように直面している(en face)ということが、わたしを呼び寄せ、わたしを求め、わたしを必要としているのである。あたかも、他者の顔が一いかなる総体からもある種の仕方で分離している純粋な他者性が直面している—直面している見えざる死が(中略)わたしを見つめている=わたしに関係している(me regarder)かのように。」「顔」に現れた暴力の痕跡すなわち隣人たちの傷みについて、レヴィナスのような悲惨な体験をしていなければ、彼の学知に触発されないのだろうか。レヴィナスは悲惨な体験というものは回想することすらできないと表現したことがある。しかし、内田樹が小津安二郎の映画を例に取り上げたように、レヴィナスの学知は日常でわたしたちが遭遇する出来事にもある。(レヴィナス,1997:339-340)

たとえば、わたしは、次のような出来事をエピソードとして聴いたことがある。ある女性が母親として自らの過酷な体験を受け止めきれずに、身代わりとして娘に責めを分与していた出来事である。

Aさんに、Aさんの苦痛の身代わりとして立てられた娘がいた。彼女の長男と娘の間には男の子が生まれるはずだった。ところが長男との月齢が近すぎたため、Aさんの身体を案じた産科医のすすめで男の子の墮胎が行われた。その後ほどなくして、Aさんは娘を授かった。産科医は、男の子を

墮胎した後の妊娠ということで、産みたくなかったAさんの希望であった連続の墮胎手術に反対し、今度は出産しないと母胎がもたないと母親に告げた。母胎の保護のために出産することにして、娘が生まれた。「おまえ(=娘)が死ねば良かった。あの子はおまえが生まれるための身代わりとして死んだ」と母は娘に言い続けた。その結果、娘は「生き残っている」という自責感を持って育った。次第に、誰が生まれることができたかわからないような状況で、男の子の生命が娘の生命の身代わりになり、娘が生かされているという有責性をAさんは感じるようにもなった。Aさんは男の子が娘の身代わりとして生命を失ったと娘に幾度も物語ることで、自分も娘も許され生きられると繰り返し信じた。

傷みとして語られるユダヤ人ホロコーストという出来事に限らず、誰が死んで誰が生き残ったかわからないような状況において、身代わりのように死んだ隣人の存在感あるいはレヴィナスのいう「顔」に迫られることはある。誰かが誰かの身代わりであることは、レヴィナスの「顔の暴力」(レヴィナス,2001:167-179)の議論における「他者への責任」を表わす。レヴィナスはいう。(同前:168169)「こう考えているのです。他なる人間への責任、お望みなら人間の顔の公現といってもいいのですが、それが、自分自身を気づかって『みずからの存在のなかで存続する存在』の殻に開いた突破口のごときものを形成するのだ、と。他人への責任であり、他者一のための『没利害』としての聖潔なのです。人間たちは聖人であり、聖潔へと向かうなどといっているではありません。わたしがいいたいのはただ、聖潔の使命はどんな人間存在によっても価値として認知され、この認知が人間的なものの定義であるということです。」

ここでいわれている「没利害としての聖潔」とは何か。それは、謙虚の姿勢である。レヴィナスは、ホロコーストを被害者として語ることには沈黙した。ひとり「生き残っている」という有責性を謙虚に感受し、傷めつけられる「顔」に公現する人間の暴力を、生き残ったものの「使命」として明るみにする。

暴力と顔の傷みは、先述の出来事からも示すことはできる。他者への暴力はいつどこで起きてても起こしてもおかしくないし、顔の傷みは、見過ごされることがなければ、そこかしこで露呈されている。しかし、レヴィナスは誰かを告発したのだろうか。レヴィナスは、暴力をとめられなかった、なにもしできなかった、「生き残っている」という有責性について、著作において繰り返し厳しく自問しているのである。レヴィナスの学知は、ひとりひとりが有責性に目覚め、「なぜわたしは生き残っているのか」と他者(=死者)の傷みとの繋がりの中で、人間の有責性に目覚めることの触発ではないか。

責任を自問するという角度ではなく、道徳的立場からレヴィナスを議論できるだろうか。レヴィナスは「あなたのいっていることは道徳的経験ですか？」と問われ次のように応じた。(レヴィナス,1997 : 176-178)

レヴィナスは、道徳的経験には経験の主体が存在しているはずである、と前置きを述べる。(同前 : 176)そのうえで、経験する主体が存在する場に「わたしはいない」という。レヴィナスにとって、倫理は、「存在すること」(esse)の解体である。(同前 : 176)これはどういうことか。誰が解体するのか。これまで議論してきたように、誰かと問えば、それは有限なる人間を超越して外から注がれる「無限の観念」といわざるをえない。レヴィナスにおける外から注がれる「無限の観念」は、デカルトからそのまま継承したものではない。レヴィナスはデカルトの「われわれのなかの無限の観念」をヘブライの学知に改定した。デカルトが思弁した「無限の観念」は、人間に備えられた内在的な性質を持つ。しかし、外から注がれる「無限の観念」は、外在的な性質を持つ働きである。

#### 4. 結び

レヴィナスはユダヤの学知をいう。(同前 : 177)『あなたの隣人を愛しなさい。その人はあなた自身のようなものである。』しかしヘブライ語聖句の最後の語 **kamokha** を聖句の最初から引き離してもよいのであれば、全然違う読み方もできます。『あなたの隣人を愛しなさい。このわざはあなた自身のようなものである。』(中略) **kamokha** は、『あなた自身』にだけ関わるのではなく、それに先立つ全ての語にかかるのです。(中略) 教え、それは尽きるところ、他なるものはわたしに先んじるということです。」先立つ全ての語とは、ユダヤ教典「タナハ」その注釈書「タルムード」における聖句と尽きることなく更新され続ける注解全体を指す。**kamokha** はヘブライ語に由来することばであり、「あなた自身」を意味する。

この学知から注目されるのは、「このわざ」である。すなわち、「愛する」主体は「このわざ」、この働きである。「隣人を愛する」際の「わざ」は「無限の観念」から来る。「無限の観念」はレヴィナス(人間)が所有できないものであり、レヴィナスを所有し超越する主(人間の次元を超えるあるじ)から注がれる働き=わざである。レヴィナスはこの「わざ」をレヴィナスの「傷つき易さ=傷つくことのできるわたし」(レヴィナス,1997 : 178)を通して公現すると結ぶ。レヴィナスにとって「愛する」とはどのような行為か。「それは尽きるところ、他なるものはわたしに先んじるということです。」(同前 : 177)に示されている。具体的にはどう解釈すればよいのか。

たとえば、倒れているひとを見たならば、「わたしに先んじて」倒れたものと考え、そのひとを助けなさい。暴力に傷み顔をゆがめているひとを見たならば、「わたしに先んじて」傷んでいるのだから、その傷みを味わいなさい。「わたしに先んじて」応答がなく沈黙している他者のために目覚め、絶えず誠実に聴きなさい。「あなたの隣人を愛しなさい。このわざはあなた自身のようなものである。」(レヴィナス,1997:177)「隣人を愛せよ」は、ユダヤ教典(旧約聖書)「レビ記」19章18節における聖句でもある。レヴィナスのこの教えを、ひとひねりしてから黙示する。ひとが他の人を愛せるのは一まだ気づいていないかもしれないが気づくまで育つことができれば—「ひとが他の人に先んじているかのように」愛されているからである。内田樹いわく、「数多くのレヴィナス研究のうちでも、レヴィナスの『愛』の概念について語ったものはあまり多くない。」(同前:336)『レヴィナスと愛の現象学』を著し、ユダヤ教のラビ(教師)が多彩な聖書解釈に関する諸議論を延々と展開するレヴィナスの「タルムード」を翻訳しえたレヴィナス研究第一人者内田ならではの証言である。その証言に信頼し、レヴィナスの「無限の観念」を考察した本稿の結びとして、ユダヤ的学知の「愛のわざ」(注6)を布置する。このわざは、エロスを超越する形而上学的な触発(注7)に根拠づけられている。有限な人間を超越して外部から働く隣人を愛するわざ、友愛は、いつ誰かの身代わりになるかもしれない非合理的な状況の下であっても、人間が育つことを支える始原の倫理となるだろう。

#### 付記

①漢字ばかりを用いず、平仮名で表現できる言葉は、平仮名を用いた。原典において「私」と表記されている言葉を、本稿では「わたし」と表記した。

②ユダヤ的学知である *mishpat* ミシュパットを「正義=裁き」というより「正義=統治」とする解釈は、本学矢野研究室出身、キリスト教たんぼぼ教会牧師原雅幸氏著作『聖書概観 9 さばき』(2020.9.11,10:22LINE 取得)ほか、原氏とのやりとりから着想を得た。

#### 注釈

(注1)合田正人が訳した『存在の彼方へ』(:333)では、デカルトの「無限の観念」がこう書かれている。「無限の観念を内包しえない思考のうちに宿っていた。」「かかる無限の観念は栄光と現在の不均衡を表しており、この不均衡こそ息を吹き込まれること、ないし、靈感にほかならない。」栄光は人間を超越する次元、現在は人間が生きる次元であり、これらの次元には差異があり、重なることはないという意味で、「不均衡」である。人間を超越する次元の霊を注入された感受性を人間が持っている。

(注 2)トーラーはユダヤ教のヘブライ語聖書における最初のモーセ五書であり、「教え」という意味である。モーセ五書は、「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」。ユダヤ教の律法が教示されている。この五書を含み、キリスト教(カトリックやプロテスタント諸派など)で「旧約聖書」といわれている書物をユダヤ教の聖書「タナハ」という。ヘブライ語、一部アラム語(ヘブライ語の方言。現在でもシリアの一部で使われている)で書かれている。タルムードはユダヤ教典の釈義、宗教生活に関する書物である。もともとイスラエルの口頭伝承が書き起こされた。タナイームとミシュナー二つの層からなる。ユダヤの儀礼から哲学的問題まで及ぶ。ユダヤ教がイスラエルだけを選んで救済する特殊な説であったのに、人間一般の救済に妥当する普遍的な説であることを聖書釈義としてタルムード研究を根拠としてレヴィナスは示した。なぜなら、トーラーにおいてユダヤ人もまた異邦人であったことが示されているからだろう。タルムードが教えるのは、聖書本文、聖書における物語、儀礼的規範、説教、聖書的概念、出来事、状況、タルムードで語っているラビ(教師)や律法博士たちの同時代人にしかわからない記号の意味である。聖書の意味を批判的かつ意識的な立場から理性的精神のうちで追究する。参照文献はレヴィナス,エマニュエル(内田樹訳)『タルムード四講和』(2015)人文書院ほか。「旧約聖書」は、ユダヤ教のモーセ五書に加えて、「ヨシュア記」「士師記」「ルツ記」「サムエル記」「列王記」「歴代誌」「エズラ記」「ネヘミヤ記」「エステル記」「ヨブ記」「詩編」「箴言」「コヘレトの言葉」(=「伝道の書」)「雅歌」「イザヤ書」「エレミア書」「哀歌」「エゼキエル書」「ダニエル書」「ホセア書」「ヨエル書」「アモス書」「オバテヤ書」「ヨナ書」「ミカ書」「ナホム書」「ハバクク書」「ゼファニヤ書」「ハガイ書」「ゼカリヤ書」「マラキ書」から構成される。レヴィナスは『観念に到来する神について』40頁「フッサールにもとづいて、意識から覚醒へ」の章題に注釈「\*」を付し、ユダヤ聖書(キリスト教「旧約聖書」)の「雅歌」第五章題二節「私は眠っていたが、私の心は目覚めていた」を抜粋し、自身の思弁を表象させている。

(注 3)ブレンターノ, フランツは、1874年から『経験的立場からの心理学』(全3巻)を著し、意識の現れすなわち心理現象の本質や機能を知覚によって記述することにより解明しようとした。物理現象ではない心理現象の固有の特性を、人間の心理現象としての志向性であると捉えた。意識によって説明できるのは、自己の心理現象だけで、外部にある物理現象ではなく、内部の物理的ではない現象を自らの知覚によって証明できるとした。心理現象を心的作用と捉えて、それを表象、判断、情動に分類した。このうち表象が基礎的な作用である。意識に実在するもののみが表象できると考えた。自らの知覚によって捉えられた心的現象を構成要素に分析し、要素間の関係を支配する法則を発見して、心的現象を普遍的に構造化することを記述的心理学という。記述的心理学は、数学がそうであるように、直観的に捉えられた基礎概念によって公理の認識に達するという方法であった。

布伦ターノがウィーン大学の教授時代のうち 1884 年から 86 年にかけて、フッサールは布伦ターノの講義を聴いて感銘を受け、数学から哲学へと関心を転換した。細谷恒夫責任編集「世界の名著 62」『布伦ターノ\*フッサール』(1980)中央公論社ほかを参照。

(注 4) 「アデュー」(à Dieu)「神」への接近について。本稿はレヴィナスの著作群のなかで、内田樹が訳した『観念に到来する神について』にとくに依拠している。内田の翻訳は彼をして「レヴィナスの愛弟子」といわしめるだけあって、ユダヤ教的内容の濃いレヴィナスの思想と乖離するような不可解な日本語の訳文が散見されない。本書第三部「存在の意味」「v 神のみもとへ」(303-305 頁)およびその前節「iv 問いかけ」(300-303 頁)から次の通り記述を引用する。「有責性とは知の、理解の、把持の、支配の欠如のことではない。それは知には還元することのできない、社会性としての、倫理的近接性のことなのである。」「倫理的思惟、社会性とは近接性あるいは友愛のことである。友愛は、「他者に対する有責性」であり、「他者性に対する純粋な無償性」である。しかも、「わたしの自由に先んじ、わたしのなかに始まるどんなことにも先んじ、いかなる現在にも先んじる」。さらに、「遡れぬほどの過去、『遙か昔』の制約は命令としてまた要請として、戒律として、他の人間の顔を通じて『異邦人を愛する』神、見えざる神、主題化不可能の神のもとから、わたしへと到来」し、「わたしがやむことなく頼ることになる『…のもとへ』(a)という前置詞でさえーその渴仰を伝えることはできない」ものである。「…のもとへ」は、「神のみもとへ」(á-Dieu)である。「遡れぬほどの過去、『遙か昔』の制約」は、レヴィナスが信頼する教典「トーラー」における「創世記」を指す。「創世記」と人間が生きる次元は隔てられているので、遡ることはできない。

「神のもとからわたしへ」にしても「神のもとへ」にしても、(a)というフランス語の前置詞がおかれる場合、「その場所」に「近接する」ことが示される。つまり、「その場所」に合致するわけではない。

(注 5)レヴィナスは「育む」という概念を直接には使っていない。しかし、「あなたの隣人を愛しなさい。このわざはあなた自身のようなものである」というレヴィナスの『観念に到来する神について』177 頁における「わざ」が一隣人を「愛する」わざーあなた(わたし)にとって、あなた(わたし)の忍耐を「育むわざ」であると黙示される。佐藤義之は、2020 年の自著『レヴィナス』の第 5 章「教え」において、大人が子供に机が遊ぶ道具ではなくて、学ぶための道具であることを分かるようにするストーリーを用いて、レヴィナスの教えを解釈している。

(注 6)レヴィナスがいう「愛」は他者=隣人への愛であり、ヘブライ的文化で用いられる「友愛」である。日仏哲学会誌の村上論文「魂の身体性ーレヴィナスにおける感受性の構造について」の注釈

17 において、「神にかたどって一ヴォロズィンのラビ・ハイムによる」というレヴィナス論文(1978)が参照されたことがわかる。村上は人間性を「祈る魂」と捉えた。なぜ、人間に祈ることが出来るかといえば、村上も述べている通り、「他者によって息を吹き込まれ、触発」(息=靈感)されているからである。この他者は、この注釈が黙示しているように、ユダヤの神を指す。レヴィナスが思弁する感受性の構造では、この「息」は「愛」に置換される。他者に愛されるから、人間は他者=隣人を愛することが出来る。この他者つまり神の愛は「エロス」ではないから、「無限の観念」に到来する「愛」もまた「エロス」ではない。

(注 7) 「エロスを超越する形而上学的な触発」という解釈は、中山元による思惟に手がかりを得た。電子資料 6 頁。「この無限の観念は、人間の精神に書き込まれた痕跡であるが、レヴィナスはその証拠を人間の『欲望』にみいだす。レヴィナスの欲望という概念は、欠如を充足するものとして考えられたプラトンの欲望ではない。世界を享受し、欠如が充足された主体がさらに他のものに向かってゆく『形而上学的な欲望』である。」違いとして指摘できるのは、人間の性愛すなわちエロスが、欠如を補い一体性として復元される欲望のわざである点に尽きる。中山元「レヴィナスにおける哲

学と宗教—レヴィナス『神と哲学』を読む」<https://polylogos.org/philosophers/levinas/levi8.html>.

2020 年 9 月 3 日取得。

#### 参考文献一覧

安喰勇平(2020)「書評『Levinas and the Philosophy of Education』」

『レヴィナス研究』第 2 号:55-59.

『合田正人訳/レヴィナス,エマニュエル(1994)『神・死・時間』法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 449).

合田正人訳/レヴィナス,エマニュエル(1997)『外の主体』みすず書房.

合田正人訳/レヴィナス,エマニュエル(1999)『存在の彼方へ』講談社(学術文庫 1383).

合田正人訳/レヴィナス,エマニュエル(2001)『他性と超越』法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 711).

原田佳彦訳/レヴィナス,エマニュエル(1986)『時間と他者』法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 178).

- 平岡紘(2018)「引き裂かれた現在—レヴィナスのフッサール『内的時間意識』の解釈をめぐって」『現象学年報』34:161-168,日本現象学会.
- 細谷恒夫責任編集「世界の名著 62」『ブレンターノ\*フッサール』(1980)中央公論社.
- 北村晋・阿部文彦訳/アンリ,ミッシェル「エックハルト」『現出の本質(上)』(2005):441-479. 法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 813).
- 木元麻里(2011)「レヴィナスにおける『近さ』のヒューマニズム—ハイデガーとの対照を手がかりに」『フランス哲学・思想研究』No.16:80-88,日仏哲学会.
- 共同訳聖書実行委員会(1987,1988)「旧約聖書」『聖書 新共同訳』1-1502.
- 熊野純彦訳/レヴィナス,エマニュエル(2005)『全体性と無限』上(岩波文庫青 691-1)岩波書店. 熊野純彦訳/レヴィナス,エマニュエル(2006)『全体性と無限』下(岩波文庫青 691-2)岩波書店. 小手川正二郎(2012)「<他人>との対話と<他者>への愛—『全体性と無限』における『エロスの現象学』の位置づけ」『フランス哲学・思想研究』No.17:133-141,日仏哲学会.
- 小手川正二郎(2014)「レヴィナス『全体性と無限』における現象学的方法と存在論的言語—『転回』解釈への一批判」『現象学年報』30:107-115.日本現象学会.
- <La Bible:l'Ancien et le Nouveau Testament>(1988)Société biblique française & Editions du Cref,Paris.
- Levinas, Emmanuel (1982)<Éthique et Infini:Dialogues avec Philippe Nemo.> Fayard, France Culture.
- Levinas, Emmanuel (2004)<De Dieu qui Vient Á L' idée.>Librairie Philosophique J.Vrin6,Place de la Sorbonne, V<sup>e</sup>.
- 「レヴィナス」(2012)『現代思想』vol.40-3.2012.3 臨時増刊号総特集,青土社.
- マリオン,ジャン=リュック&Jean=Luc&,プランティ=ボンジュール,G.『現象学と形而上学』三上真司/重永哲也/檜垣立哉訳(1994)叢書・ユニベルシタス 433,法政大学出版局.< Marion,J.-L.,& Planty=Bonjour,G.,Dieu sans L'être.(1984)Librairie ArtêmeFayard.>
- 村上暁子(2012)「レヴィナスにおける<彼>の人対称秩序による他性の意味論—デリダの批判をめぐって」『フランス哲学・思想研究』No.17:142-150,日仏哲学会.
- 村上暁子(2017)「魂の身体性—レヴィナスにおける感受性の構造について—」『フランス哲学・思想研究』No.22:219-230,日仏哲学会.
- 村上光彦訳/ヴィーゼル,エリ(2010)新版『夜』みすず書房.

永井晋 『『雅歌』の形而上学/生命の現象学』(2012)『現代思想』vol.40-3.2012.3 臨時増刊号総特集, 青土社.

根無一行(2011)「レヴィナス的ケノーシスにおける苦しみの祈りの問題」『フランス哲学・思想研究』No.16:62-70,日仏哲学会.

永井晋・中島盛夫訳/マリオン, ジャン=リュック(2010)『存在なき神』法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 944).

西谷修訳/レヴィナス,エマニュエル(2005)『実存から実存者へ』筑摩書房(ちくま学芸文庫).

西山雄二訳/レヴィナス,エマニュエル(2010)『倫理と無限—フィリップ・ネモとの対話』筑摩書房(ちくま学芸文庫).

大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃(2002)『岩波 キリスト教辞典』岩波書店.

佐藤真理人・小川昌宏・三谷嗣・河合孝昭訳/レヴィナス,エマニュエル(1996)『実存の発見』法政大学出版局(叢書・ユニベルシタス 522).

佐藤義之(2020)『レヴィナス—「顔」と形而上学のはざままで』講談社(学術文庫 2567). 新日本聖書刊行会(2017)「旧約聖書」『聖書 新改訳 2017』1-1635.

内田樹訳/レヴィナス,エマニュエル(1997)『観念に到来する神について』国文社.

内田樹訳/レヴィナス,エマニュエル(2008)『困難な自由—ユダヤ教についての試論』国文社.

内田樹(2011)『レヴィナスと愛の現象学』文藝春秋社(文春文庫).

内田樹(2013.7.30,17:55)「レヴィナスの神」『思いつくままに随想』

<https://blog.goo.ne.jp/wasabi96/e/496c72e1a2d8a42a1654...>(2020.8.11,20:53 取得) 内田樹訳/レヴィナス,エマニュエル(2015)新装版『タルムード四講話』人文書院.

内田樹訳/レヴィナス,エマニュエル(2015)新装版『タルムード新五講話—神聖から聖潔へ』人文書院.